# ネットいじめの現在（いま）
## ――変化する子どもたちの人間関係

### いじめはどのように変化してきたのか

皆さんは「いじめ」にどのようなイメージをもたれていますか？　一般的には、陰で悪口を言われる、学級内で無視をされるなどの陰湿な行為を想像することが多く、時には、殴る蹴るなどの暴力的な行為や金銭をゆすられるといった犯罪に近い行為を思い浮かべる場合もあるかもしれません。確かに、私たちの目に見える範囲のいじめとはこうした行為を指しますが、**現代のいじめの姿は、皆さんが子どもの頃に見たり聞いたりしたものとは、その「質」が大きく変化**しています。

いじめの定義は時代によって変わってきました。いじめという用語が初めて定義されたのは1985（昭和60）年のことです。当時の文部省（現在の文部科学省）によるいじめの定義は「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的に攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」でした。その内実はと言えば、「足が短い」「頭が悪い」「走るのが遅い」といったその人のもつ負の側面をあげつらい、いじめの標的にするという傾向をもっていました。したがって教師から見ても、どのような子がいじめの被害者になりやすいのか、その原因が何なのかが「見えて」いたこと、指導においてもいじめは加害者と被害者という当事者間での問題であるという認識が強かったことなどが特徴としてあげられます。

しかし、いじめそのものの性質は時代とともに次第に変化してきました。例えば、90年代に入ると上記のような負の側面だけが強調されるのでなく、「顔がかわいい」や「頭がよい」「先生の言うことをきちんと聞く」といったように、周囲からプラスの評価を受ける子も、いじめの対象となってしまったのです。その背景には、友人関係の同質性の高まりがあると言われています。自分たちの仲間として許容できる範囲が狭くなり、マイナス、プラスの両側面において子どもたちの「普通」の範囲が設けられ、その許容幅を越えた子に対して、いじめの刃（やいば）が向けられることになったのです。

この頃になると、いじめは学校の抱える大きな課題として世間から注目を集めることになります。結果として、いじめは周囲から「わかりにくい」ものへと深化したことが指摘されています。**【図1】**を見ると、90年代中頃以降、いじめの発生件数は一見すると減少したのですが、それはいじめが遊びに偽装されたり、隠蔽されたりしていたにすぎず、いじめはどの時代であっても子どもたちの日常生活に大きな影響を与えていたのです。

2000年代に入るといじめの実態をとらえる研究が日本だけではなく、先進諸国において積極的に進められていきます。これらの研究から、必ずしも強い立場の人間がいじめの加害者というわけでもなく、被害者にもなりえることや、クラスの全員が特定の児童生徒をいじめるような形は少なくなり、むしろいつも一緒にいる友人関係のなかでいじめが発生するケースが増えていたことが明らかになってきました。

2007（平成19）年には文部科学省による**いじめの定義が「一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたこ**

佛教大学副学長・教育学部教授
原　清治

［はら・きよはる］神戸大学大学院博士後期課程修了（学術博士、神戸大学）。専門は教育社会学、学校臨床学。関西教育学会会長、日本教育社会学会理事など。著書は『ネットいじめの現在（いま）』（ミネルヴァ書房、2021年10月）他、多数。

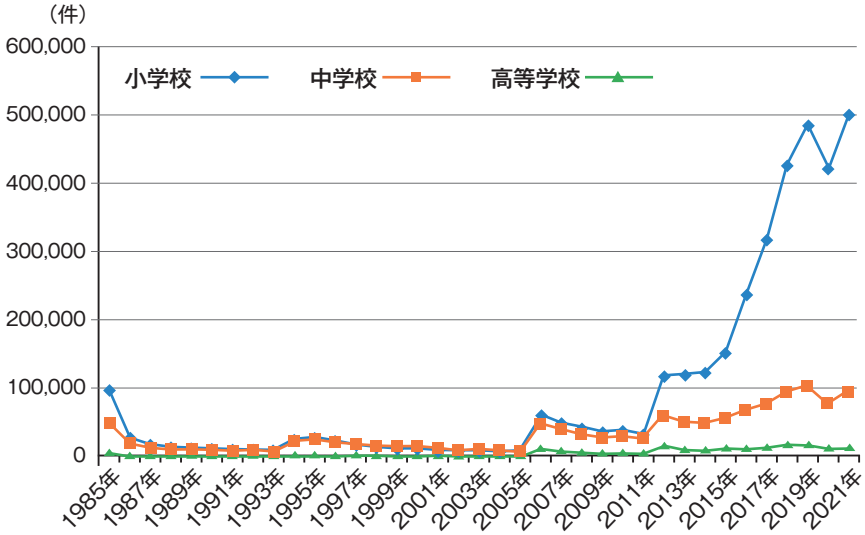
とにより、精神的な苦痛を感じているもの」となり、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」と変更されました。「一定の人間関係」とは、いつも一緒にいるなど、周囲から見れば「友達」のように見える関係のことを指しています。

同省は同じグループにいる友達関係こそいじめの発生しやすい、危うい集団であることを明示しました。すなわち、クラスのなかで浮いている、いわゆる「ぼっち」の子ではなく、いつも同じグループを形成している集団にいじめが入り込んでいること、したがっていじめを第三者が見つけることは困難になるという実態を重視したのです。また、「いじめられた子どもの立場に立って」、被害を「認知」するという定義への変更によって、いじめの件数は大きく増加しました。

もっとも新しい定義は2013年の「いじめ防止対策推進法」に明記されています。そこには「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等、当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定められています。つまり、いじめを受けた側が「いじめられた」と意思表示をすれば、いじめの認知件数として数えられます。

結果としていじめ件数は増加の一途をたどり、2020年度こそ新型コロナウイルスによる対面の減少の影響から若干数値を下げましたが、2022年には再び増加傾向にあるという実態が明らかとなっています。

【図1】いじめの認知（発生）件数の推移




出典：文部科学省『令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果』（https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf 2022.10.27アクセス）より筆者作成

## ネットいじめとは何か

コロナ禍によって子どもたちの生活は大きく変化しました。その最たるものの一つがインターネットやオンラインゲームの流行でしょう。コロナ禍による影響で学校は幾度となく休校措置や分散登校など、通常の学校生活が送れない状態が続きました。部活動の制限や修学旅行や運動会の中止など、本来であれば楽しい学校生活を送る子どもたちに対してさまざまな側面で我慢を強いる機会が多くありました。

そうした子どもたちの心身のストレスのはけ口となったのが、インターネットやオンラインゲームです。とりわけ緊急事態宣言時には自宅から出られない状況が続き、「インターネットやゲームをするしかない」状態に陥った子どもが少なくありませんでした。

その結果、夜遅くまでインターネットやゲームにのめりこみ、朝に起きられない、学校の授業を集中して受けることができない、宿題をきちんと提出できないといった日常生活に支障をきたす子どもたちが増えたのです。コロナ禍以前にも不登校傾向のある子どもたちから同様の行動が見られたのですが、コロナ禍ではそれまで学校に登校している児童生徒からも報告されるようになりました。

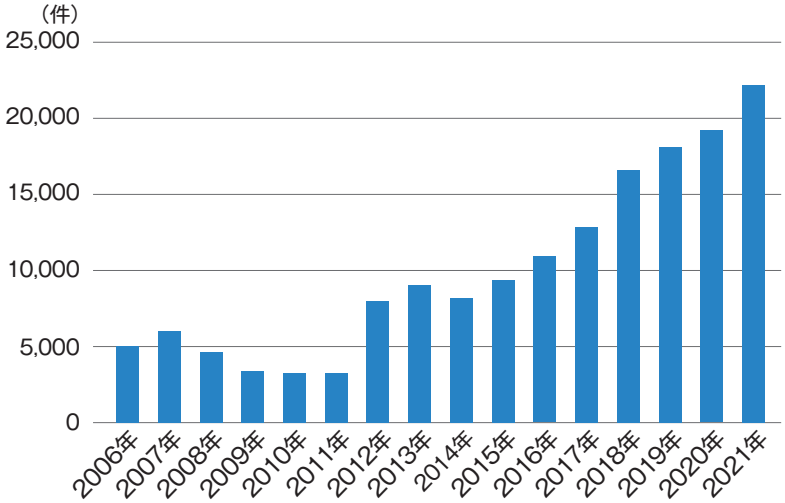
こうしたインターネットやゲームの流行に伴い、増えてきたのがネットいじめです。インターネットを使って相手を誹謗中傷するネットいじめが拡大傾向にあることは文部科学省のデータからも指摘できます【図2】。これを見ると、ネットいじめは2006年から調査を開始し、2011年頃までは減少していましたが、2012年以降増加し続けていることがわかります。子どもたちの日常生活にインターネットやゲームは

浸透し、それは当たり前の風景の一つとなっているのです。私たちはそれを前提とした対応を求められていると言えるでしょう。

## ネットいじめはどのように発生したのか

「ネットいじめ」という用語が登場したのは、2000年代中頃だと言われています。長崎県佐世保市で小学校6年生の女子が、インターネット上の掲示板のやりとりから同級生を刺殺してしまった事件が大きく報道されたのを覚えている方もおられるでしょう。あの事件は2004年のことでした。

【図2】パソコンや携帯電話等を使ったいじめの認知件数の推移




出典：文部科学省『令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果』(https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf 2022.10.27アクセス)より筆者作成

当時はまだ「ネットいじめ」という用語はありませんでしたが、インターネット上のやりとりの齟齬(そご)が子どもたちの生死に関わる事件となった出来事として知られています。

そこから東日本大震災が発生する2011年までが、いわゆるネットいじめ初期の段階であると指摘されています。2006年からインターネット上でのいじめ行為に関する項目がいじめ調査に導入され、その件数は2007年に増加していますが、それ以降、一貫して減少しています。この時期のネットいじめとしては、ある特定の個人に向けて「ウザイ、キモイ、死ね」といった言葉を向けるものが多くを占めていました。したがって、ネットいじめの舞台は、誹謗中傷したい相手を直接攻撃できるメールや匿名掲示板、学校裏サイトなどでした。

ただ、こうしたネットいじめは携帯電話のシステムの改良、例えばフィルタリングの導入や学校裏サイトなどの閉鎖や監視などを行うことによって次第に減少していきました。それに代わる形で2012年以降に登場したのは、直接、名前や固有名詞を使わないので、自分への誹謗中傷を見つけにくい、いわば間接型のネットいじめです。この時期からTwitterやLINEといったSNSが高校生にも浸透し、個人名を出さなくても「○○高校の××は調子に乗っている」という風に、読み取った人間にはわかる形で悪口や個人情報が、周囲のノリを煽(あお)るように書き込まれるようになったのです。

この時期にはさまざまなSNSが登場しています。インターネットの専門的な知識がなくても、スマートフォンや携帯電話が手元にあれば気軽にアプリを使ってネット上に投稿できるようになった点も、ネットいじめの増加に拍車をかけたと言えるでしょう。

私たちの調査データでは、ネットいじめはリアルいじめとも強く相関しており、リアルいじめの被害にあう子どもはネットでも同様の被害者となりやすい傾向があります。また、ネット空間は一般に「同調圧力」が強く発動すると言われます。つまり、ネット空間は自分の発信した情報に「イイね」を求める承認欲求が強くはたらき、「ノー」が言いにくいことなどが特徴と言えるでしょう。

2022年現在、ネットいじめの認知件数は一貫して増加しており、子どもたちの日常生活に大きな影響を与えています。

## いじめに対して、大人はどう向き合えばよいか

ネットいじめもリアルいじめも、子どもたちの生活に与える影響は決して小さくありません。いじめに直面した時、私たち大人はどのように向き合わなければならないのでしょうか。

いじめの背景として指摘されているのは子どもたちの人間関係の変化であり、同質性の高まりです。結果として、子どもたちのグループは同じような価値観や考え方をもつ者同士の集まりになっており、グルー

## >>> ネットいじめの現在

執筆者の本

**『ネットいじめの現在(いま):子どもたちの磁場でなにが起きているのか』**
**原 清治 編著**
[ミネルヴァ書房、2021年9月、2,420円]

プ間の交流が乏しい「分断」状態であると言われています。こうした「分断」を食い止めるための手段の一つとして、アサーティブ・トレーニングを紹介します。

**アサーションとは**「自己主張」と訳されることが多いのですが、教育学では**折り合いをつける、折衷案を考える、といった相手との関係とのなかで自己主張すること**を示しています。

例えば、家庭でのインターネットのルールを決める時、保護者が頭ごなしに「10時以降にスマートフォンは触らない」というルールを決めてしまっても、子どもがそれを守ることは稀です。子どもは「友達からの連絡が塾から帰ってきた後に入ってくるから、それまではスマートフォンを使わせてほしい」と主張するでしょう。それに、「寝る1時間前にはスマートフォンを手放してほしい」という保護者の主張から、お互いの折衷案を考えるのがアサーションです。

こうした**両者の主張を折り合わせる経験が、学校現場でも家庭でも必要**だと考えられます。これまで喧嘩などのトラブルが生じると、学校では両者を引き離して相互に話を聞くといった方法がとられていました。しかし、これだと両者が折り合いをつけることはできません。これからは**当事者同士が折り合いをつけながら、自分たちで考えて行動すること、すなわち「主体的で対話的で深い」関わりが求められる**のです。

さらに、いじめを抑止するため、子どもたちに人間同士の「つながり力」を育くむ必要性を指摘する声が上がっています。

アメリカの社会学者・パットナムは、グループの結束を高める社会関係資本には、自治会や同窓会のようにグループ内部の結びつきを高める「結束型」と、NPO法人のように考え方や価値観の異なるグループをつなげる「橋渡し型」の2つがあると言っています。

「結束型」は排他的なアイデンティティと同質性を強化するものであり、内向きの志向ではあるものの、同じグループ内の仲間同士で、お互いさまと思う関係性（互酬性）と連帯を高める点が優れています。

それに対して「橋渡し型」は、異なる外部グループをまとめたり、広範囲で情報共有ができる点に優れており、大きな集団のまとまりを作り、仲間同士の連帯に向けたアイデンティティを構築します。

そして、**今日の子どもたちに求められる「つながり力」には、とりわけ「橋渡し型」の力が重要**なのではないでしょうか。現代の子どもたちは、同質性の高いグループをつくっていることが多く、自分の所属するグループでのつながりは非常に強いため、「結束型」の社会関係資本を構築する意識は高いと言えます。

しかし、自分たちとは異なる価値観をもつ他のグループにも目を向けたり、さらには、グループ同士を橋渡しできる子どもはどのくらいいるのでしょうか。いじめを受けている生徒や、人間関係がうまく築けずに教室で立ちすくむ他者に対して、思いやりの心をもって「うちのグループに来たらいいよ」と声をかける子どもは残念ながら意外に少ないのです。

いじめを少しでも減らそうと思えば、子どもたちに「橋渡し型」の社会関係資本を形成させるため、周囲の大人たちはどのように関わっていけばいいかといった視点が必要になるでしょう。

そのヒントとして、人間関係のなかでもとりわけ「互酬性」が注目されます。神戸学院大学の前林清和は、人から何かしてもらったのなら、こちらからも何かの形で「お返し」をするような微妙な心の動きが、win—win の人間関係をつくると言います。

この当たり前に見える行為の意味を理解することこそ、学校や保護者も含めた社会全体で向き合わなければならない課題なのかもしれません。そのためには、**他者を思いやる心をどう育てなければならないのか**。言うのはやさしいですが、今どきの子どもたちにはなかなか理解しにくい難問であると言えるでしょう。

そのために**親は子どもの声をしっかりと「聴く」姿勢を持つことが何よりも大切**です。「なるほど」や「そう考えていたのか」と頷(うなず)きながら子どもを理解しようとする姿勢が、子どもにとっても「しっかり聴いてもらえた」感覚を育て、その感覚が今度は自分が他者の話を「聴き」、他者を思いやる社会関係資本構築の基となるのです。